福岡市埋蔵文化財調査報告書第1377集

姪浜遺跡 5

めいのはま

—第6次調査報告—

2019

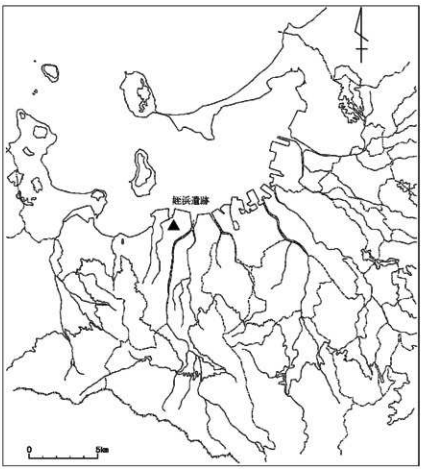
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1377集

姪浜遺跡 5

（めいのはま）

—第6次調査報告—



遺跡略号　MHM−6
調査番号　1702

2019

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は共同住宅建設工事に伴う姪浜遺跡第６次調査について報告するものです。この調査では、弥生時代の甕棺墓や中近世の集落遺跡を検出し、貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、作州商事株式会社様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます

平成３１年３月２５日

福 岡 市 教 育 委 員 会
教育長　星子　明夫

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が共同住宅建設工事に伴い、福岡市西区姪浜３丁目地内で平成29年4月19日から同年7月27日にかけて発掘調査を実施した、姪浜遺跡第６次調査の報告書である。
2．発掘調査および整理報告書作成は、民間受託事業として実施した。
3．遺構の実測と写真撮影は上角智希が行った。
4．遺物の実測は上角、大庭友子が行った。
5．遺物の写真撮影は上角が行った。
6．製図は上角、大庭が行った。
7．本書で用いる方位は磁北である。
8．本書に掲載した座標は世界測地系を用いた。
9．座標・標高は、都市再生街区基本調査成果の補助点2A171（H=1.199m）から引照した。
10．本書に使用した遺構略号は以下の通りである。
　SD　溝　　SE　井戸　　SK　土坑　　ST　甕棺墓　　SX　その他の遺構　　SP　ピット
11．本書に関わる記録・遺物等は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
12．本書の執筆・編集は上角が行った。

遺　跡　名	姪浜遺跡	調　査　次　数	6次	調　査　略　号	MHM-6
調査番号	1702	分布地図図幅名	89 姪浜	遺跡登録番号	401350367
申請地面積	881.24 ㎡	調査対象面積	664.06 ㎡	調　査　面　積	575 ㎡
調査期間	平成 29（2017）年 4 月 19 日～7 月 27 日			事前調査番号	28-2-632
調　査　地	福岡市西区姪の浜３丁目 3135-9、3135-16、3135-17、3161-1、3161-2				

本　文　目　次

第１章　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　1．調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　2．調査の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２章　遺跡の立地と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　1．立地と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　2．既往の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第３章　調査の記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　1．調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　2．甕棺墓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　3．溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
　4．遼東・山東系土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
　5．壷形埴輪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
　6．その他の弥生時代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
　7．集石遺構・石組土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
　8．中近世のその他の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
第４章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

挿　図　目　次

第１図　姪浜遺跡の位置（1/5000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第２図　昭和初期の姪浜と五島山古墳（1/5000）・・・・・・・・・・・・3
第３図　調査区位置図1（1/2500）・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第４図　調査区位置図2（1/400）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第５図　調査区西壁土層図（1/120）・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第６図　中近世の遺構配置図（1/150）・・・・・・・・・・・・・・・・7
第７図　弥生時代の遺構配置図（1/150）・・・・・・・・・・・・・・・8
第８図　ST01・02・03実測図（1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・10
第９図　ST01・02甕棺実測図（1/8）・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第10図　ST03甕棺実測図（1/8）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第11図　ST04・05・06・07実測図（1/20）・・・・・・・・・・・・・13
第12図　ST04・05・06甕棺実測図（1/8）・・・・・・・・・・・・・・14
第13図　ST07・08・09・10甕棺実測図（1/8）・・・・・・・・・・・16
第14図　ST08・09・10・12実測図（1/20）・・・・・・・・・・・・・17
第15図　ST12甕棺および出土遺物実測図（1/8、1/2）・・・・・・・18

第16図　SD13断面図（1/100）……………………………19
第17図　土器集中部SX11実測図（1/40）……………………19
第18図　SX11出土遺物実測図1（1/4）………………………20
第19図　SX11出土遺物実測図2（1/4）………………………21
第20図　SX11出土遺物実測図3（1/4）………………………22
第21図　SX11出土遺物実測図4（1/4）………………………23
第22図　SX11出土遺物実測図5（1/4）………………………24
第23図　SX11出土遺物実測図6（1/4）………………………25
第24図　SD13出土遺物実測図（1/4）…………………………26
第25図　壺型埴輪実測図（1/4）………………………………29
第26図　その他の弥生土器実測図（1/4）……………………30
第27図　SX108、SK83・101実測図（1/40）…………………31
第28図　SX108出土遺物実測図（1/4）………………………31
第29図　SK83・101出土遺物実測図（1/4）…………………32
第30図　その他の中近世遺物実測図（1/4、1/2）…………33

写　真　目　次

写真1　1区全景（北から）
写真2　2区溝SD13検出状況（北から）
写真3　2区第1面全景（北から）
写真4　2区第2面全景（北から）
写真5　4区SD13検出状況（南から）
写真6　甕棺ST01（南から）
写真7　甕棺ST02（南から）
写真8　甕棺ST03（西から）
写真9　甕棺ST05・06（東から）
写真10　小児棺ST07（北から）
写真11　甕棺ST12（南から）
写真12　土器集中部SX11（西から）
写真13　SX11作業風景
写真14　SX11（南東から）
写真15　集石遺構SX108（南西から）
写真16　石組土坑SK83（南東から）
写真17　石組土坑SK101（北から）
写真18　1区北西部表土剥ぎ段階（東から）
写真19　1区遺構検出作業（北から）
写真20　1区遺構掘削作業（北東から）
写真21　1区完掘状況（南東から）
写真22　2区表土剥ぎ直後（北から）
写真23　2区遺構掘削状況（北東から）
写真24　3区全景（北から）
写真25　4区全景（南から）
写真26　甕棺ST04（西から）
写真27　甕棺ST08（東から）
写真28　甕棺ST09（北から）
写真29　甕棺ST10（南東から）
写真30　3区で検出した甕棺片（北西から）
写真31　土坑SK51（東から）
写真32　井戸SE92（南から）
写真33　井戸SE109（東から）
写真34　甕棺
写真35　SX11出土土器
写真36　壺型埴輪、遼東・山東系土器ほか

第１章　はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市西区姪の浜三丁目3135番9・16・17、3161番1（申請後に3161番2が追加申請された）における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成28年10月21日付で受理した（事前審査番号28－2－632）。

これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である姪浜遺跡に含まれていることから、平成29年1月26日と3月10日に試掘調査を行った。試掘では敷地のほぼ全面にわたって弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が現地表下50～70cmで検出された。

遺構の保全等に関して申請者と協議を行ったが、工事による埋蔵文化財への影響が回避できないため、共同住宅および立体駐車場の工事が行われる範囲について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成29年4月14日付で作州商事株式会社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年4月19日から発掘調査を、翌平成30年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

２．調査の組織

調査委託：作州商事株式会社

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：平成29年度・資料整理：平成30年度）

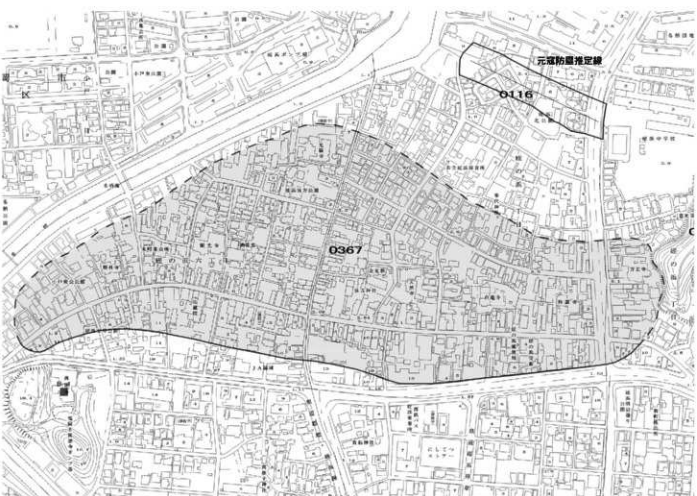
調査総括：	文化財部埋蔵文化財課長	常松幹雄（29年度）
	文化財活用部埋蔵文化財課長	大庭康時（30年度）
	（平成30年度に部の名称が変更された）	
	同課調査第１係長	吉武学（29・30年度）
庶　　務：	文化財活用課管理調整係	松原加奈枝（29・30年度）
事前審査：	埋蔵文化財課事前審査係長	本田浩二郎（29・30年度）
	同課事前審査係主任文化財主事	池田祐司（29年度）
		田上勇一郎（30年度）
	同課事前審査係文化財主事	清金良太（29年度）
		朝馬俊也（30年度）
		山本晃平（30年度）
調査担当：	埋蔵文化財課調査第１係主任文化財主事	上角智希（29・30年度）

第２章　遺跡の立地と環境

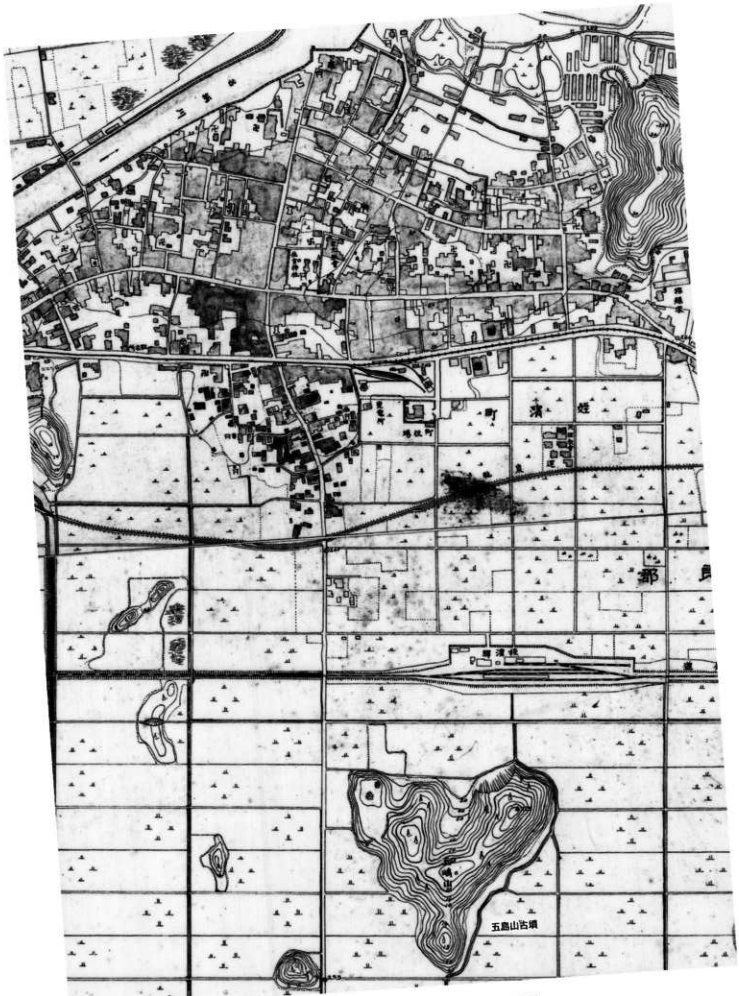
１．立地と歴史的環境

姪浜遺跡は、早良平野の入り口、室見川の西にあり、博多湾に面する新期砂丘上に立地する。姪浜近辺の博多湾岸には、愛宕山や小戸の丘陵など第三系の丘陵が点在しており、その間をつなぐように砂丘が形成されている。小戸の東側が姪浜砂丘、西側が生の松原砂丘で、縄文海進後の退潮時に形成されたものと考えられる。これらの砂丘列の背後には後背湿地が形成され、姪浜以南には広い低平な湿地が広がっていた。一方、姪浜遺跡が乗る砂丘の前面に、もう一つ砂丘が形成されている。元寇防塁がこの砂丘上を走っていると考えられ、弥生時代以降鎌倉時代以前に形成された砂丘列である。

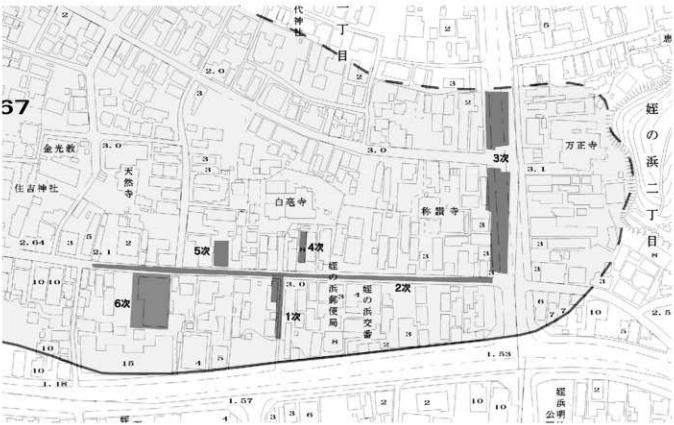
歴史を概観すると、本遺跡古砂丘上では旧石器が採集され、新期砂丘上には弥生時代の集落と墓群が広がり、砂丘後背の低地部には橋本一丁田遺跡・福重稲木遺跡・石丸古川遺跡など、突帯文から板付式土器を出土する初期農耕遺跡が分布する。砂丘南の第三紀層独立丘陵上には箱式石棺から二神二獣鏡・銅鏃等を出土した古墳前期の五島山古墳が立地していた（第２図）。中世鎌倉期の文献には「肥前国役所姪浜警固番役」と地名が初見し、近世には長崎・平戸へと通じる唐津街道の、筑前二十一宿の一つに数えられ、宿代官が置かれた。また、茶屋、本陣と称した藩主の別館があり、お茶屋奉行が置



第１図　姪浜遺跡の位置（1/5000）



第2図　昭和初期の姪浜と五島山古墳(1/5000)



第3図　調査区位置図1(1/2500)

かれた。製塩も盛んで、元禄年間には塩浜奉行が置かれ、慶長年間には酒造が始まり、芦屋から鋳物師が移り住んで鋳造業も始まる。漁業・廻船・製塩・産業・交通で栄えた地域であった。近代には姪浜炭鉱が開かれ、石炭関係産業の隆盛とともに町も大きく発展した。現在も集落内には近世・近代の町屋が多く残されており、近世町家のたたずまいを現在に伝えている。

2．既往の調査

姪浜遺跡ではこれまで５度の調査が実施されている。第１次調査（調査番号7105・市報23集）では工事中に発見された中期後半の甕棺２基が調査された。

第２次調査（7907・市報1058集に概報）は、旧唐津街道における下水道工事に伴う夜間の緊急調査で、数十基の甕棺群が発見された。調査は遺跡の東半において実施された。第１・４次調査地点からその東側にかけてのⅡ－Ａ・Ｂ区において甕棺が集中して発見された。Ⅱ－Ｂ区では古墳石室も確認されている。第６次調査地点（本書）の前面を含むⅠ区ではⅡ区寄りで数基の甕棺が出土するのみで墓域の中心から外れるようである。

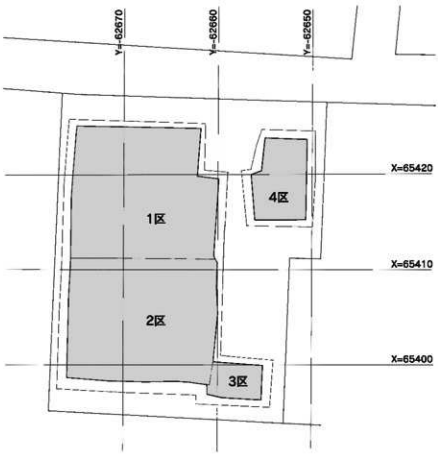
第３次調査（9252・市報478集）は遺跡東端の道路建設に伴う調査で、弥生時代中期から古墳時代後期にかけての竪穴住居跡や土坑、甕棺が検出された。黒色磨研の無文土器高坏や漢式三角鐵、貝玉、弥生時代の製塩土器の出土が注目される。第４次調査（9844・市報1058集）では弥生中期の甕棺５基と大型土坑が検出された。第５次調査（0631・市報1209集）では弥生時代の竪穴住居跡２基、石蓋土壙墓１基が検出された。

第３章　調査の記録

１．調査の概要

【調査区の設定】

調査は、排土を敷地内で処理する都合から、１区から４区に分けて行った。最初に共同住宅建設部分の北半を１区として調査し、反転後に南半の２区を調査、最後に立体駐車場建設部分２ヶ所のうち敷地南東隅のほうを３区、敷地北東隅のほうを４区として調査を行った（第４図）。なお、調査範囲は今回の建築工事で遺跡が破壊される範囲に限られるため、将来、敷地内の未調査の範囲については発掘調査が必要である。



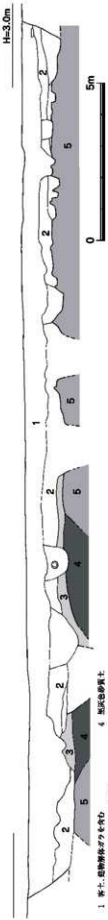
第4図　調査区位置図2(1/400)

【遺構面の設定】

試掘調査によると、敷地ほぼ全面がＧＬ－60cmまで攪乱土壌で覆われ、近現代の掘り込みが多い。この攪乱のため敷地北半ではＧＬ－70～90cmで砂丘面を検出するが、部分的にＧＬ－50cmで砂丘もしくは遺構覆土に達した。敷地中央付近から南側へ砂丘面が落ち、弥生中期から古墳時代初めの包含層が広がりＧＬ－140cmに及ぶ。ただし、試掘トレンチのひとつでは南端がＧＬ－70cmで砂丘面となり、敷地中央にくぼみ状の地形がある可能性がある。

１区では、近代以降の攪乱土壌を重機で除去すると、直下で部分的に砂丘面が検出され始めた。そこから攪乱土壌の多くがなくなるまでさらに20～30cm程度下げて遺構検出面とした。茶褐色・黒色砂質土の中近世の遺構が面積の8割以上を占める。地山の土は淡黄色の砂丘砂である。遺構面の標高は1.6～1.8mである。遺構精査後に砂丘砂を部分的に50cm以上さらに掘り下げて、これが二次堆積ではないことを確認した。遺構面は１面だけである。

２区では、１区と同じ高さまで表土をすき取り、標高1.8m付近を遺構検出面（第１面）とした。試掘トレンチ跡の土層断面を確認すると、第1面の地山である灰黄褐色砂の下に、黒灰色砂層が堆積



第5図　調査区西壁土層図(1/120)

し、その下に地山の淡黄色砂層がある。この面を第2面とした。低いところで標高1.1mを測る。

３区は標高1.5～1.6m、４区は標高1.8～1.9mで検出した淡黄色の砂丘砂の面で調査を行った。

結果的に、１、３、４区は１面だけの調査、２区は中近世の遺構面と弥生時代の遺構面の2面を調査したことになる。

【調査区西壁の土層】（第5図）

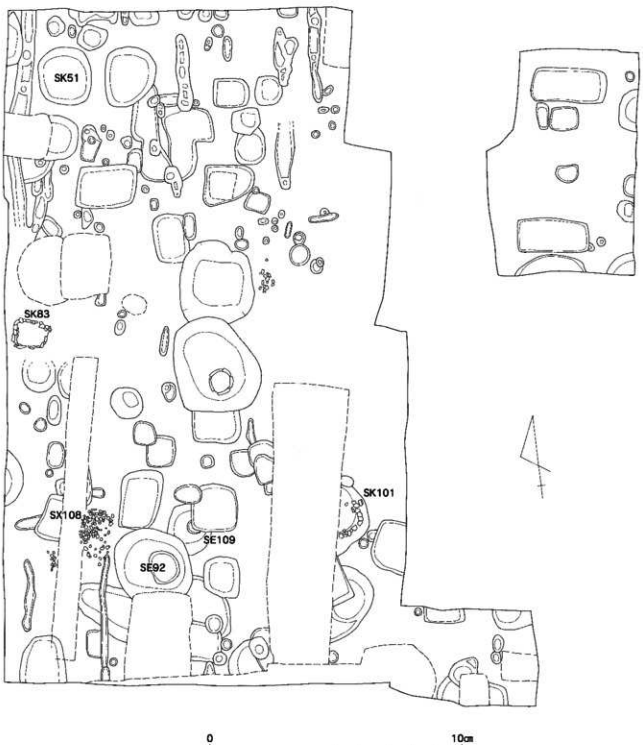
調査地の現地表はほぼ平坦で、標高は調査区北側が2.7m、南側が2.6mである。

1層は調査直前まであった味噌蔵を解体した後の整地層、2層は褐色土で近代以降の遺物を含む。2層までを重機ですき取った。全般的に2層の直下で5層の淡黄色の砂丘砂（地山）があらわれ、それを中近世の土坑が切り込んでいる。地山の砂丘は本来もっと高いレベルまであったが、中近世以降の多くの土坑の掘削によって大部分が削られてしまったと推測される。調査区の南側では、2層と砂丘砂（5層）の間に3層の灰黄褐色砂、4層の黒灰色砂質土が堆積する。4層は弥生時代中期から後期の遺物を含む溝状の遺構SD13である。

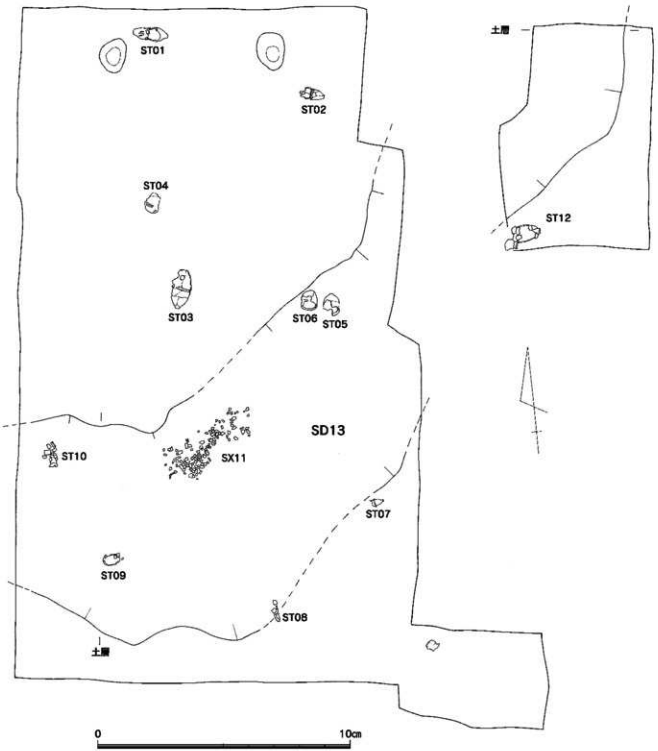
【遺構の概要】

検出した遺構の時期は、弥生時代と中近世以降の2時期に分けられる。弥生時代の遺構として、甕棺墓11基と幅7～8mの溝状の遺構1条、土坑2基を検出した（第7図）。甕棺の時期は金海式から須玖式にわたり、調査区内からは他にも甕棺の破片があちこちで出土した。さらに多くの甕棺墓があったが中近世の遺構によって破壊されている。溝状の遺構SD13からは弥生時代中期を中心とした時期の土器が出土し、とくに完形に近い土器群が集中する部分はSX11として取り上げ報告している。また、整理作業中に、SD13出土遺物のなかに壺形埴輪が複数個体含まれることがわかった。調査段階ではわからなかったが、調査区内に古墳があり、壺形埴輪が周溝内に落ちたのであろう。そしてSD13と重なっていた古墳の周溝を掘りわけることができなかったようだ。調査区内では埴輪のほかには古墳の主体部の痕跡や石材は出土していない。壺型埴輪をもつとならば前方後円墳の可能性もあろう。貴重な新知見である。

中近世以降の遺構は密に存在する（第6図）。井戸4基、集石遺構1基、石組土坑2基、土坑48基、溝8条、ピット約70基である。中世の土坑の多くは方形で1辺が1～1.5mであるのに比べて、近世の土坑は隅丸方形や長方形で1辺が2mを超える大型のものである。集石遺構SX108およびその周辺から輸入陶磁器が集中して出土した。中近世の土坑の埋土には、もれなく弥生土器の破片が混入しており、むし



第6図　中近世の遺構配置図(1/150)



第7図　弥生時代の遺構配置図(1/150)

ろ弥生土器片の数のほうが多い事例もある。なお、埋土から中近世と弥生時代の遺構は区別可能である。中近世の遺構の埋土は黒褐色や茶褐色系でプランが明瞭であるのに対し、弥生時代の遺構の埋土は地山の砂丘砂とよく似た黄白色系の砂でプランは地山となじんでしまっておぼろげである。中近世の遺構埋土への頻繁な弥生土器片の混入から、もともとこの場所には弥生時代の遺構が密に存在していたが、後世の遺構によってその多くが破壊されてしまったものと推測される。

2．甕棺墓

11基の甕棺墓を検出した（第7図）。金海式新段階が3基、城ノ越式が3基、須玖式が4基、立岩式併行期の小児棺が1基である。ほかにも溝SD13出土遺物のなかにほぼ完形に復元できた須玖式甕棺1基があり、3区でも甕棺（城ノ越式で丸みを帯び口縁部に刻み目を入れたもの）の上半部の大きな破片が出土する（写真30）など、所々で甕棺片が散見される。中近世の遺構により壊されているが、さらに多くの甕棺墓が存在していたと推測する。

甕棺の主軸方向は、南北方向と東西方向の2通りがある。古い時期の金海式・城ノ越式は南北方向、新しい時期の須玖式・立岩式は東西方向に軸をとる傾向がある。例外的に城ノ越式ST09は東西方向、須玖式ST08は南北方向である。

甕棺墓の埋土は、地山である淡黄色砂丘砂との判別が困難である。乾燥した砂にホースで水をかけていると、地山としか見えない場所から甕棺の一部が姿を現すというような発見のされ方がしばしばあった。遺構図平面には土坑掘方の線を入れておらず、断面は実線で表現しているが不正確である。調査区全体を完掘した後に地山を50cm程度掘り返して甕棺の検出漏れがないかを確認した。

溝SD13との切り合い関係は、金海（新）式から城ノ越式段階の甕棺（ST05・06・09・10）のほうがSD13よりも古い。溝の黒灰色砂を除去した後、その下でこれらの甕棺を検出している。

5基の甕棺墓において人骨の一部が確認できたが、いずれも遺存状態が悪い。脆弱で取り上げ時に壊れるものが多く、運よく取り上げられても、砂が骨の周囲に匿着しており、それを剥がそうとすると骨の強度がもたずに壊れるという状況であった。年齢・性別ともに不明である。

ＳＴ０１（第8図、写真6）

頭位を東にとる合せ口甕棺である。頂部中央は後世の遺構により破壊されていた。型式は須玖式段階で全体の形が丸みを帯びた系列のもの。棺内から頭蓋骨と下肢骨3本が出土した。

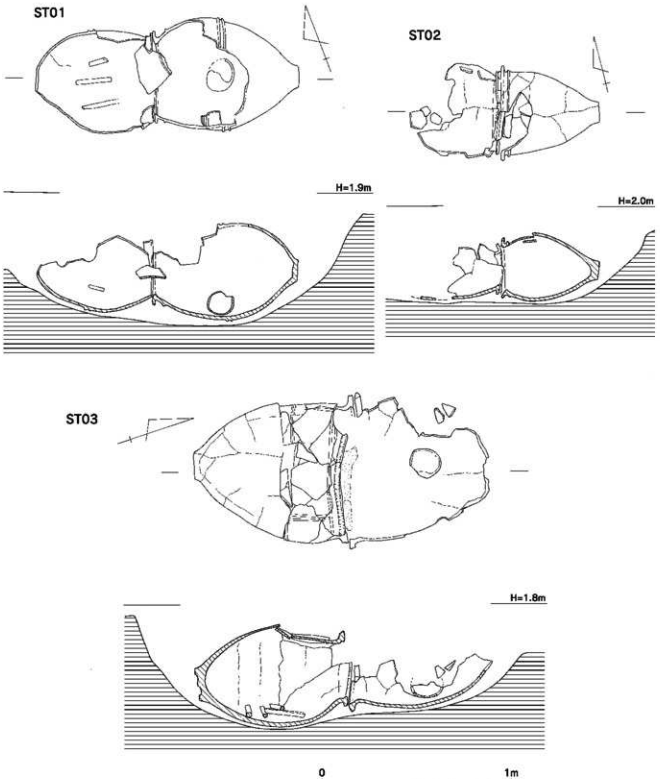
第9図1は上甕である。口縁部を打ち欠く。断面三角形の突帯が口縁部直下に1条、胴部に2条めぐる。胴部上半が内弯し全体的に丸みを帯びた器形である。頸部径33.2cm、胴部最大径50.8cm、残高61.6cmを測る。

2は下甕である。口縁は外側に発達し、断面三角形の突帯が口縁部直下に1条、胴部に2条めぐる。胴部上半が内弯し全体的に丸みを帯びた器形である。口径43.8cm、器高77.5cm、胴部最大径58.2cmを測る。

ＳＴ０２（第8図、写真7）

主軸を東西方向にとる合せ口甕棺である。やや小ぶりの上甕はよく残るが、下甕の大半は消失する。型式は須玖式段階で全体の形が丸みを帯びた系列のものである。

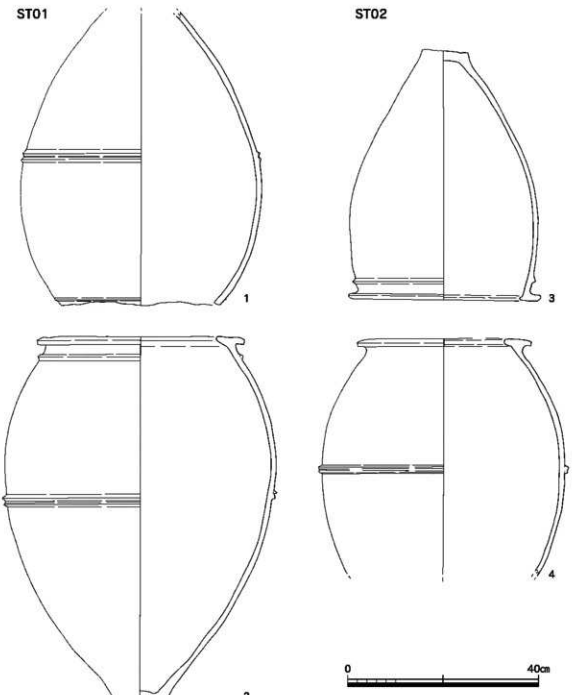
第9図3は上甕である。口縁部はＬ字形で内側にもわずかに張り出す。断面三角形の突帯が口縁部直下に1条めぐる。胴部上半が内弯し全体的に丸みを帯びた器形である。口径40.8cm、器高52.6cm、



第8図　ST01･02･03実測図(1/20)

胴部最大径39.8cmを測る。

4は下甕である。口縁は外側に発達し、胴部上半が内弯した全体的に丸みを帯びた器形である。胴部の突帯は、断面コ字型のものの中央を窪ませて2条の突帯があるように見せる。口径36.8cm、残高49.5cm、胴部最大径52.8cmを測る。



第9図　ST01・02甕棺実測図(1/8)

ＳＴ０３（第8図、写真8）

頭位を北にとる合せ口甕棺である。上甕の天井側は後世の遺構により破壊されていた。型式は金海式新段階である。棺内から頭蓋骨と下肢骨4本が出土した。

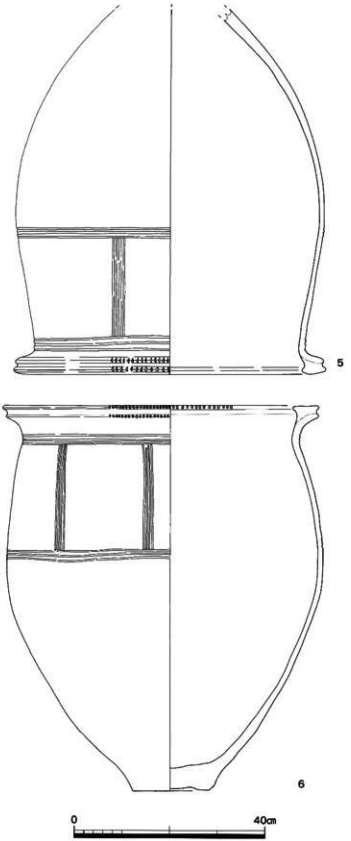
第10図5は上甕である。頸部は口縁部付近で屈曲し、口縁部の内側に厚手の粘土帯を貼り付けて肥厚させる。口縁の外側に刻み目を施す。体部上半に横方向の3条の沈線と縦方向の4条の沈線からなる区画文を施す。口径66cm、残高77cm、胴部最大径65cmを測る。

6は下甕である。頸部は口縁部付近で屈曲し、口縁部の内側に厚手の粘土帯を貼り付けて肥厚させ、上面を平坦にする。口縁の外側と内側に刻み目を施す。体部上半に横方向の3条の沈線と縦方向の4条の沈線からなる区画文を施す。底部は分厚い。口径66.6cm、器高81.4cm、底径16.0cm、胴部最大径66.7cmを測る。ほぼ完存する。

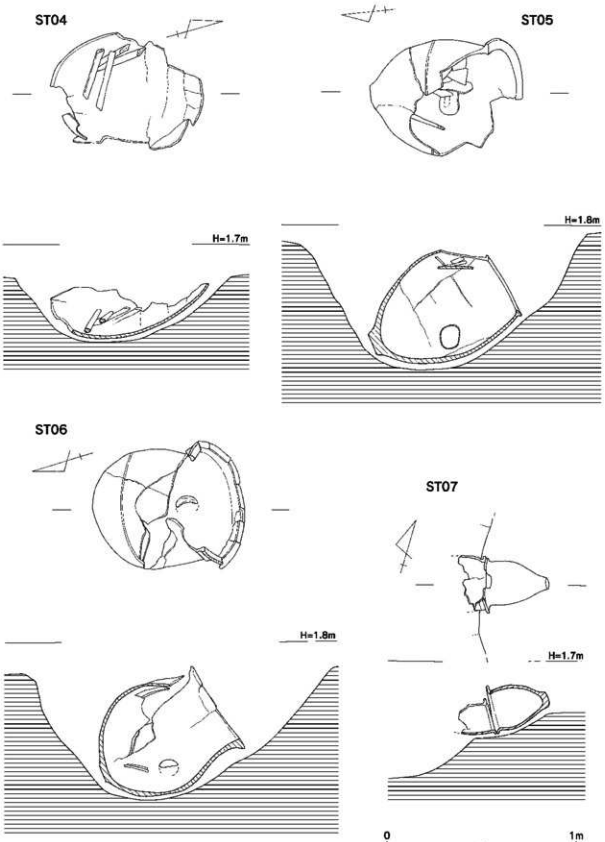
ＳＴ０４（第11図、写真26）

主軸を南北方向にとる。地表に近い部分は大きく破壊され、土坑底に近い部分のみ残る。型式は金海式新段階である。下肢骨4本が出土した。

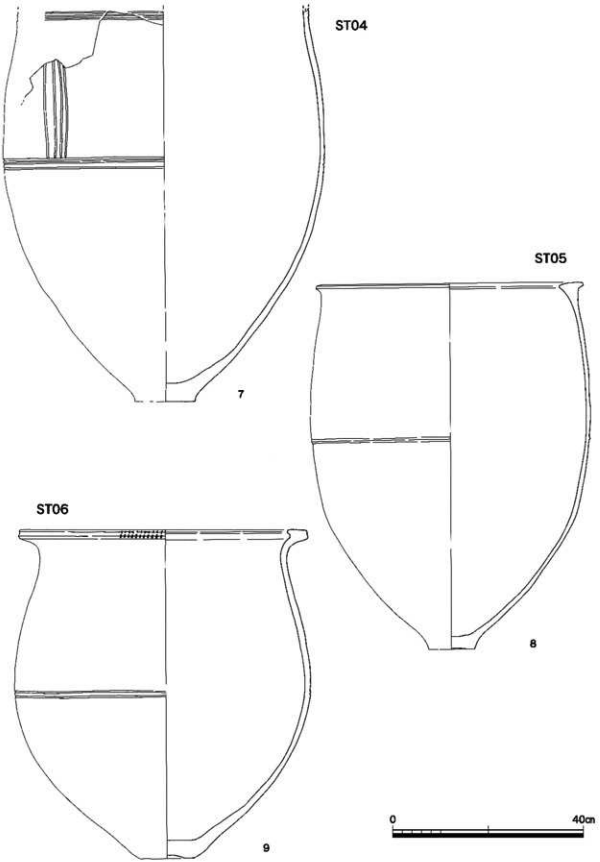
第12図7は口縁部を欠く。体部上半に横方向の3条の沈線と縦方向の4条の沈線からなる区画文を施す。残高82.4cm、胴部最大径69cm、底径13.8cmを測る。



第10図　ST03甕棺実測図(1/8)



第11図　ST04･05･06･07実測図(1/20)



第12図　ST04･05･06甕棺実測図(1/8)

ＳＴ０５（第11図、写真9）

ST06と並んで検出された。SD13の黒灰色砂質土を除去し、その下から見つかった。頭位を南にとり、斜めに埋置する。型式は城ノ越式である。棺内から頭蓋骨と下肢骨1本が出土した。

第12図**8**は口縁部が分厚く粘土帯を貼り付けているのだろう。胴部中位に低くシャープな突帯を1条めぐらす。口径56.8cm、器高77.2cm、胴部最大径59.2cm、底径9.8cmを測る。

ＳＴ０６（第11図、写真9）

ST05と並んで検出された。SD13の黒灰色砂質土を除去し、その下から見つかった。頭位を南にとり、斜めに埋置する。型式は金海式新段階である。棺内から頭蓋骨と下肢骨2本が出土した。

第12図**9**は類部が口縁部付近で屈曲し、口縁部の内側に厚手の粘土帯を貼り付けて肥厚させ、口縁の外側に刻み目を施す。胴部中位に2条の沈線をめぐらす。口径61.0cm、器高69.6cm、胴部最大径62.6cm、底径11.4cmを測る。口縁部の1/4を欠くほかは完存する。

ＳＴ０７（第11図、写真10）

主軸を東西方向にとる合せ口の小児棺である。下甕は完存するが、上甕の大部分は後世の遺構に切られて消失する。時期は立岩式の段階である。

第13図**10**は日常容器を転用した上甕である。口縁部はL字型で内側に低く傾斜し、内面の稜が明瞭である。口縁直下に三角突帯をめぐらす。外面は縦刷毛目調整。口径27.8cm、残高16.9cmを測る。

11は日常容器を転用した下甕である。口縁部は内側に低く傾斜するく字形口縁である。底部は平底で厚い。外面は縦刷毛を施す。口径26.7cm、器高31.5cm、胴部最大径25.0cm、底径6.2cmを測る。

ＳＴ０８（第14図、写真27）

主軸を南北方向にとる合せ口甕棺である。東側が試掘時のトレンチによって切られ消失する。この遺構のみ、トレンチ断面土層の観察から、地山とほぼ同じ淡黄色砂の埋土を確認できた。地山との境界はぼんやりとしていて、埋土が地山に汚染んでいる。型式は須玖式であろう。

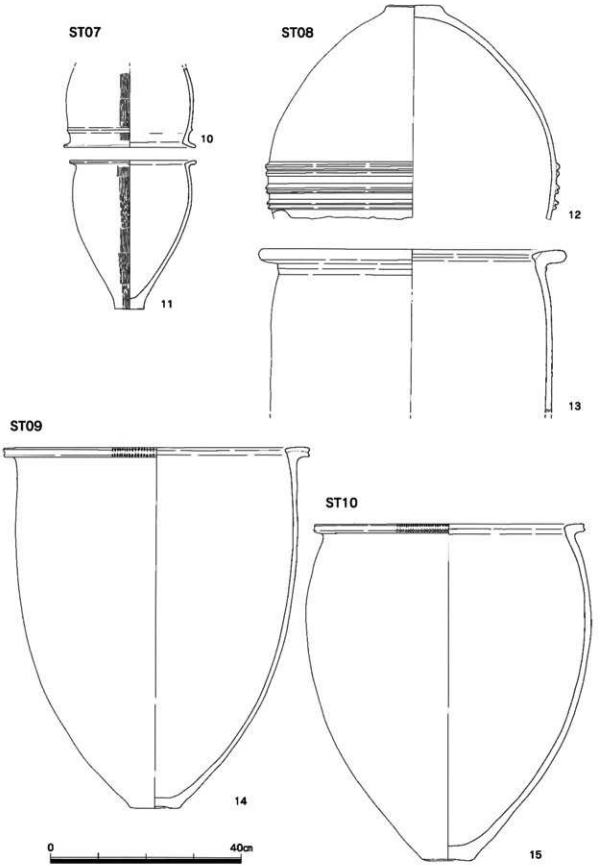
第13図**12**は壺形の上甕である。肩より上を打ち欠く。底部は平底で胴部にむかって大きく膨らみ、最大径部に3条のM字形の突帯をめぐらす。残高45.2cm、胴部最大径61.0cm、底径12.0cmを測る。

13は下甕である。口縁部付近のごく一部の破片が残る。口縁は外側に折り曲げ、内側に粘土帯を貼り付けている。口縁直下にわずかに盛り上がる稜がある。胴部は直立する。残高44.4cm、口径64.8cmを測る。

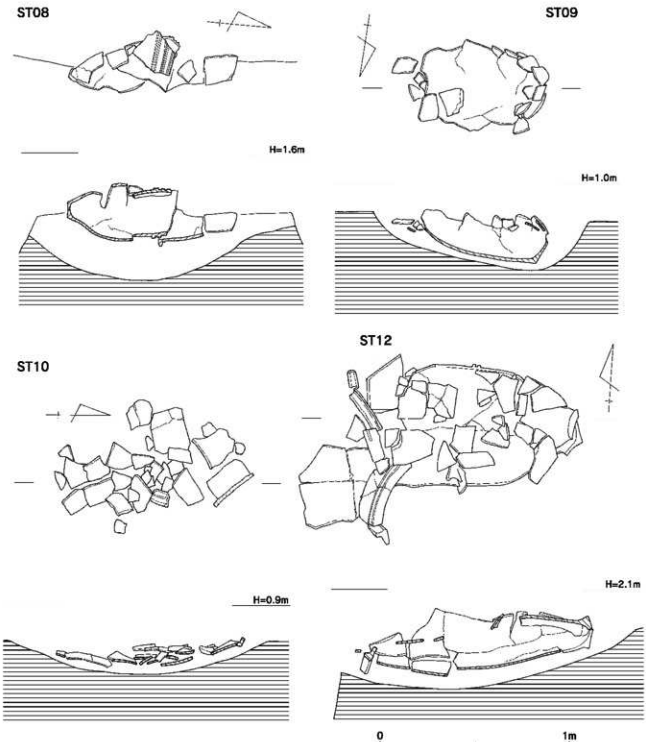
ＳＴ０９（第14図、写真28）

主軸を東西方向にとり、SD13の黒灰色砂質土よりも下から検出された。地表に近い側は大きく壊され、土坑底に近い部位だけが残る。やや斜めに埋置されている。型式は城ノ越式である。

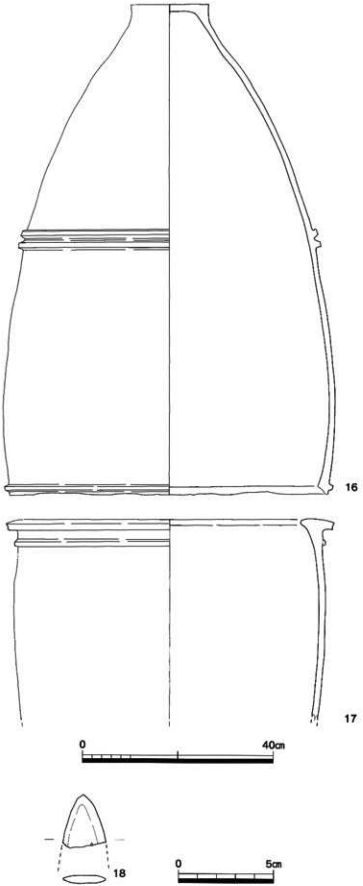
第13図**14**の口縁部はL字状に外に曲げられ、その上面に粘土帯を貼り付け肥厚させる。口縁外側に刻み目を施す。胴部上半はほぼ直立し、底部はわずかに上げ底を呈する。口径65cm、器高76cm、胴部最大径60cm、底径10.4cmを測る。



第13図　ST07･08･09･10甕棺実測図(1/8)



第14図　ST08･09･10･12実測図(1/20)



第15図　ST12甕棺および出土遺物実測図(1/8、1/2)

ＳＴ１０（第14図、写真29）

SD13の黒灰色砂質土の下から検出した。甕棺は小片に割れて原状をとどめていない。相当数の破片があることから、この位置もしくは近接した位置に墓坑があったものと推測する。上半・胴部下半・底部の3つのパーツをもとに図上で合成・復元した。肥厚した口縁部や底部の形態から推測するに、城ノ越式であろう。

第13図**15**の口縁部は外側に強く屈曲し、その上面に粘土帯を貼り付け肥厚させている。底部は厚みがあり上げ底気味である。全体的に丸みを帯びた器形である。口径57.2cm、器高71.0cm、胴部最大径60.4cm、底径10.4cmを測る。

ＳＴ１２（第14図、写真11）

主軸を東西方向にとる合せ口甕棺である。土圧で潰れ、下甕の下半は後世の遺構により切られ消失する。型式は須玖式である。棺内から石鏃の切先が出土した。遺体に刺さっていたものか。

第15図**16**は上甕である。口縁部を打ち欠く。縦に長い器形で、コ字形突帯が口縁直下に1条、胴部中位に2条めぐる。残高103.8cm、胴部最大径70.0cm、底径8.2cmを測る。

17は下甕である。口縁部はＴ字型で外側にやや傾斜する。口縁直下にコ字形突帯が1条めぐる。口径69.2cm、残高42.2cmを測る。

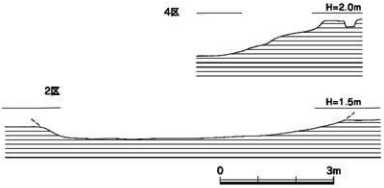
18は石鏃の切先である。

3．溝

ＳＤ１３（第7図、写真2・4・5）

調査区を北東から南西の方向に斜めに横切る溝SD13を検出した。溝は調査区の南半で西に向きを変えるように見える。溝の幅は約7～7.5m、底面の標高は0.7mである。4区で地山の砂丘砂を確認できる標高が1.8mなので、元々の深さは1.1m程度と推測される。溝の立ち上がりは非常に緩やかで人工的に掘られたものか自然地形の落ちなのか、判断がつかなかった（第16図）。溝の埋土は黒灰色砂質土である。地山が淡黄色の砂丘砂であるため、黒灰色砂は非常に目立つ。

弥生時代中期から後期にかけての土器がコンテナ38箱分出土した。とくに溝の底から完形に復元できる土器群が集中して出土する場所があり、そこを土器集中部SX11として別個に取り上げを行った（コンテナ10箱分）。調査の終了後、遺物の整理・分類作業の段階で、壺型埴輪や中国の遼東・山東半島に見られる遼東・山東系土器、朝鮮半島の無文土器が見つかった。

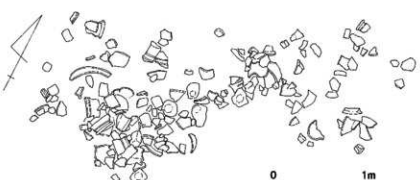


第16図　SD13断面図(1/100)

【土器集中部ＳＸ１１】（第17図、写真12～14）

溝SD13の中でもとくに土器が集中して出土した一群をSX11として報告する。溝の底面に長さ4.5m、幅2mにわたって土器片が集中して分布し、完形に近く接合できる遺物がかなりあった。完形品をこの場所に意図的に置いた可能性が高い。弥生時代中期中頃から後半の遺物（須玖Ⅰ式・Ⅱ式）が多く、一部後期初頭の遺物が含まれるようである。丹塗り土器も多く、それらは祭祀に使用された可能性がある。

第18図**19**は丹塗りの広口壺である。頸部のつけねのしまりがなく、素口縁である。外面は頸部と胴部の境界に明瞭な稜線が確認できる。器面を丁寧にナデて仕上げ、頸部に縦方向の暗文を等間隔で施す。外面全体と内面の頸部上半に丹塗りを施す。口縁部の



第17図　土器集中部SX11実測図(1/40)

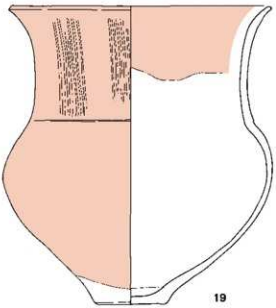
1/4を欠く以外は完存する。口径27.7cm、胴部最大径28.6cm、器高31.6cm、底径7.6cmを測る。**20**は甕である。口縁部は逆L字型で直下に1条の突帯がめぐる。底部は上げ底である。外面は縦刷毛、内面はナデ調整。ほぼ完存する。口径25.8cm、胴部最大径25.7cm、器高33.1cm、底径6.7cmを測る。

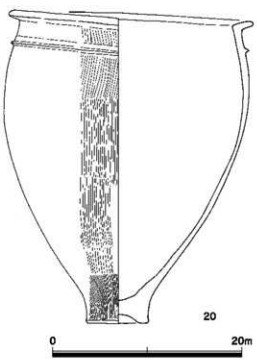
第19図21～24は甕である。**21**は鍋形口縁で直下に突帯がめぐる。ほぼ完存し口径35.0cm、器高41.5cmを測る。**22**はく字状口縁で口径28.4cm、器高34.1cmを測る。**23**はく字状口縁で胴部上半はほぼ直立する。口径30.6cm、器高33.5cmを測る。**24**はく字状口縁で胴部がふくらむ。後期初頭にくだるだろう。口径25.4cm、胴部最大径29.6cm、器高32.5cmを測る。

第20図**25**～**29**は甕の口縁部である。25は大型品で口径45.6cm。29は口縁の端部を上方につまみ上げる。**30**・**31**は甕の底部である。

第21図**32**は甕形土器である。口縁部は鍋形口縁で刻み目を入れる。球形に近い胴部の上半に3条のコ字形突帯をめぐらし、これにも刻み目を施す。底部は薄い平底である。外面の頸部より上から口縁部内面にかけて丹塗りを施す。ほぼ完存し、口径36.8cm、器高57.0cm、胴部最大径48.6cm、底径15.6cmを測る。

33は丹塗りの広口壺である。胴部と頸部の境は明瞭な稜をなし、頸部は外反して素口縁につながる。頸部外面は横ナデの後、部分的に縦方向の磨きを入れて装飾する。頸部内面は丁寧な横ナデ。胴部外面は横方向の磨きを施す。外面全体と内面の頸部から口縁部にかけてを丹塗りする。口径32.2cm、器高33.3cm、頸部径20.4cm、胴部最大径28.2cm、底径8.0cmを測る。



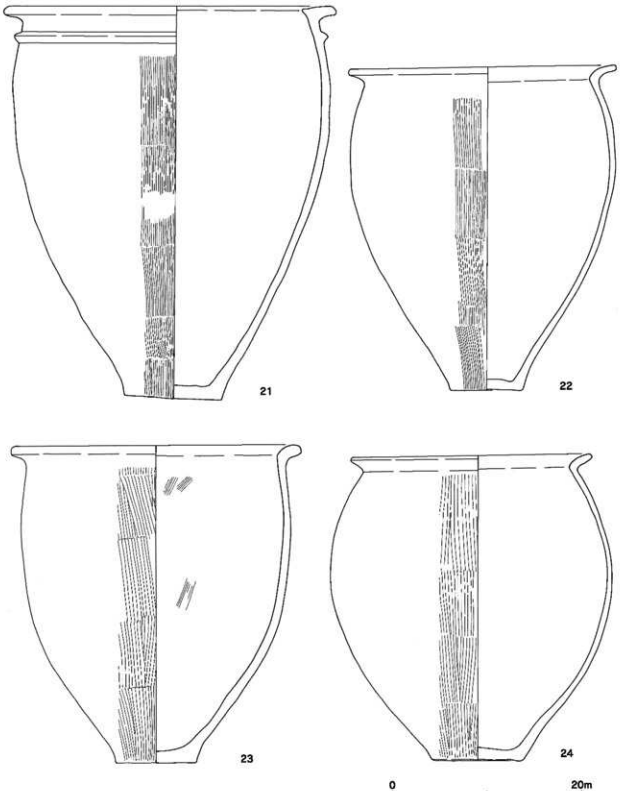


第18図　SX11出土遺物実測図1(1/4)

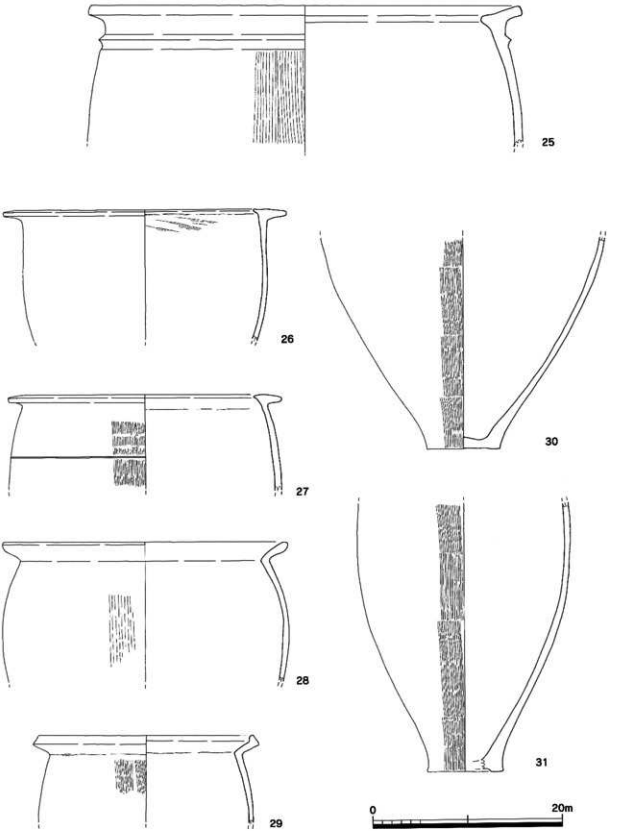
34は広口壺の口縁部である。鍋形口縁で頸部と胴部の境に1条の三角突帯をめぐらす。外面に丹塗りを施す。口径27.0cmを測る。

35は袋状口縁壺である。外面に丹塗りを施し、口径17.0cmを測る。

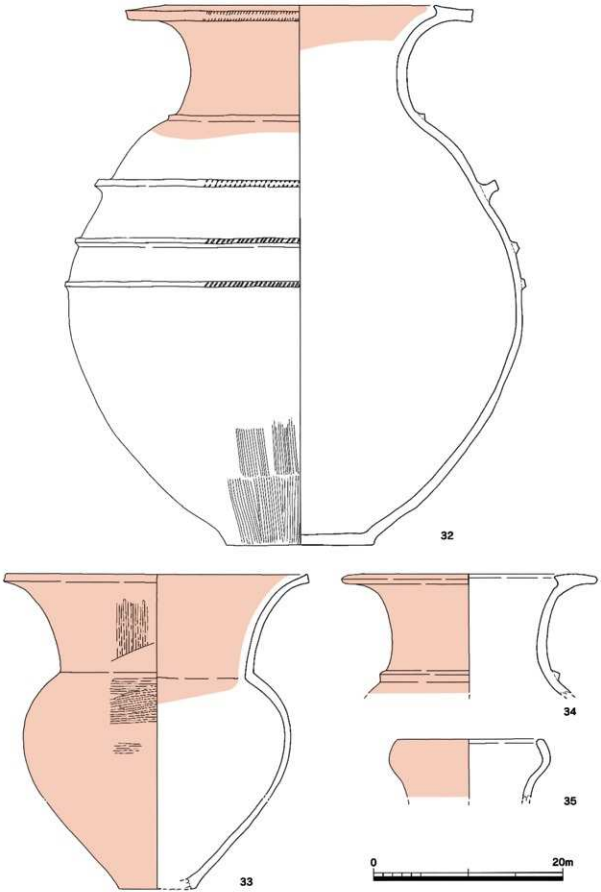
第22図36～38は長胴の壺である。**36**は鍋形口縁で薄い平底、胴部に２条のコ字形突帯をめぐらす。外面は丁寧なナデ調整で、口縁部内面は横刷毛。丁寧なつくりのわりには形がいびつで突帯は水平にめぐっていない。ほぼ完存し、口径30.6cm、器高55.8cm、胴部最大径38.2cmを測る。**37**は外面縦刷毛、内面ナデ調整で胴部に2条のコ字型突帯がめぐる。底部に穿孔する。残高39.6cm、胴部



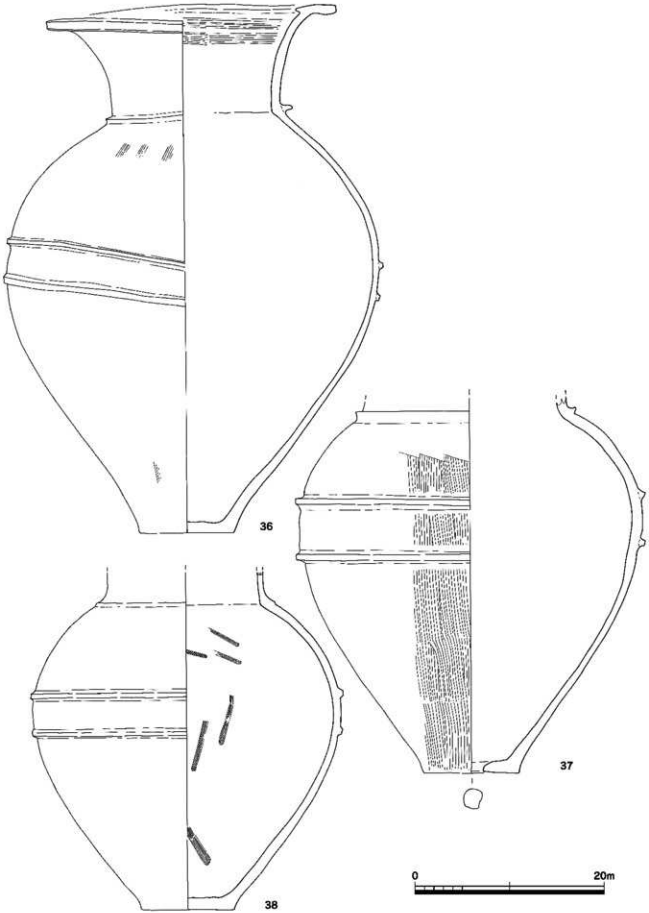
第19図　SX11出土遺物実測図2(1/4)



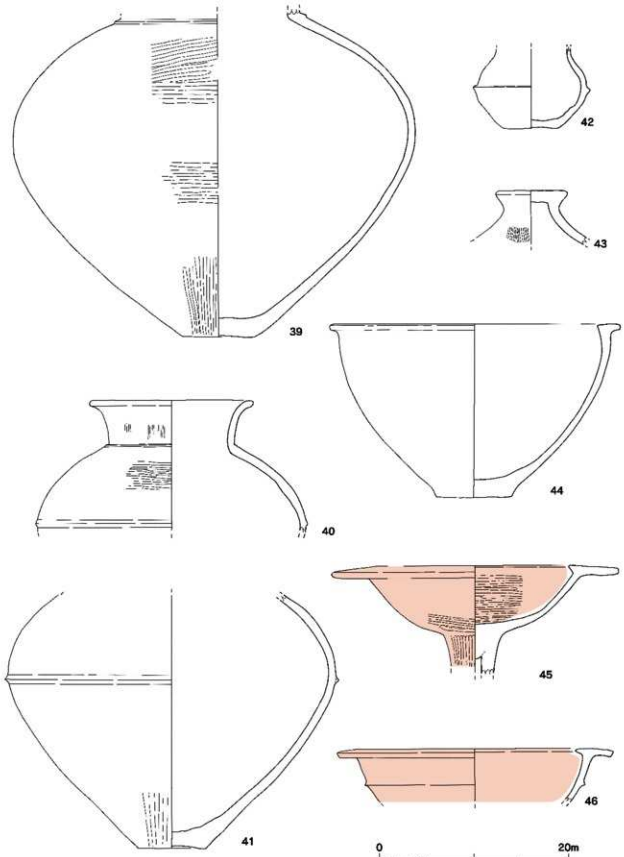
第20図　SX11出土遺物実測図3(1/4)



第21図　SX11出土遺物実測図4(1/4)



第22図　SX11出土遺物実測図5(1/4)



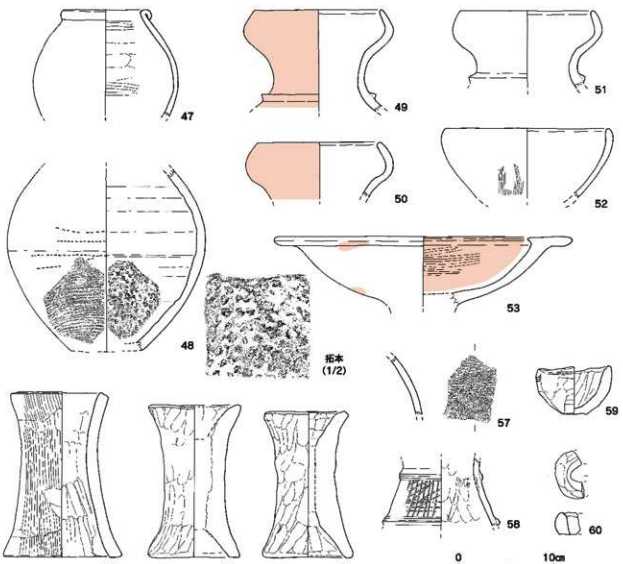
第23図　SX11出土遺物実測図6(1/4)

最大径37.0cmを測る。**38**も胴部に2条のコ字型突帯がめぐる。残高35.7cm、胴部最大径32.8cm。

第23図39～41は壺である。**39**は胴部が横に大きく膨らむ。胴部は横方向の磨き、底部は縦刷毛。残高34.4cm、胴部最大径42.4cmを測る。**40**は直口壺である。**41**は胴部が大きく膨らみ、最大径部に三角突帯がめぐる。残高26.8cm、胴部最大径35.2cmを測る。**42**は平底の小型壺である。胴部最大径12.3cm。**43**は蓋である。天井部が薄い。**44**は鉢である。口径30.8cm、器高18.3cm、底径8.0cmを測る。**45**・**46**は丹塗り高坏である。45は口縁部が外に長く伸びる。杯部内面と外面の脚部から杯部の付け根にかけてを丁寧に磨く。全面に丹塗りを施す。口径30.4cm。46は蓋形口縁で杯部中位に三角突帯がめぐる。内外面に丹塗りを施す。口径29.2cm。

【その他のSD13出土遺物】

SD13からは大量の弥生土器が出土したが、紙幅の都合上、SX11に含まれない種類の遺物を中心にいくつか報告する。第24図**47**は朝鮮半島の無文土器を模した擬粘土帯土器の壺である。口縁を折り



第24図　SD13出土遺物実測図(1/4)

返して丸くする。外面は磨滅する。内面は横方向の指ナデや磨きで丁寧に仕上げる。色調は灰白色を呈する。口径9.6cm、胴部最大径15.4cmを測る。**48**は遼東・山東系土器である。瓦質の土器で灰色を呈する。胴部外面上半は横ナデ、下半は横方向の縄目が一周する。内面は横ナデ調整で下半に特徴のある当て具痕跡が残る。胴部最大径20.8cm、残高19.5cmを測る。詳しくは後述する。**49**～**51**は袋状口縁壺の口縁部で丹塗りのものがある。**52**は鉢である。**53**は高坏である。鋤形口縁が長く伸び、内面に丹塗りを施す。**54**～**56**は器台または支脚である。**57**は中国地方系の土器である。甕か壺の肩部と思われる破片で、外面に櫛状工具で「列点」を横に連続的に、しかも二段同様に施文している。久住猛雄氏のご教示による。**58**は初期須恵器の器台である。**59**は手づくね土器である。**60**は環状の滑石製品である。

【調査の進捗と溝に関する認識の推移】

出土遺物の99％以上が弥生土器であるが、整理作業時に壺型埴輪が複数個体見つかったことで溝の時期や性格についての検討が必要になった。調査段階では古墳の周溝がある可能性はまったく想像していなかった。調査で明らかになっていった所見を時系列に沿って述べる。

1．試掘調査において、この黒灰色砂の弥生土器包含層が確認されていた。調査区を南北に縦断する３本のトレンチの南側で検出され、南に行くほど深くなる。姪浜遺跡が立地する砂丘は海岸線に並行して東西方向に長く伸びる。標高が最も高い砂丘の尾根は、本調査区に北接する旧唐津街道とほぼ一致する。よって、黒灰色砂包含層は砂丘の後背湿地へむかって地形がくだっていくところに自然堆積した包含層であろうと推測され、筆者自身もそう考えていた。

2．北側の１区の調査では、試掘で確認された黒灰色砂包含層は分布想定範囲に含まれていない。後から考えると１区南東隅の甕棺ST05・06上を覆う暗赤褐色砂が包含層の続きであったのだが、色味がちがったため、別の土層と捉えていた。この位置では遺物があまり出土しなかった。

3．南側２区の第２面調査において、黒灰色砂包含層を検出した段階（写真2）で、予想とは異なり調査区南端の一部に地山が現れ、包含層がここで途切れることがわかった。包含層を掘り進めると、なだらかに立ち上がる溝になった。砂丘の尾根がもうひとつ調査区の南側にもあり、その鞍部に自然堆積した遺物包含層だと解釈した。

4．北東隅の４区の調査でも黒灰色砂包含層を検出した（写真5）。包含層は砂丘の尾根筋の方向に斜交する。自然地形にしては方向が不自然である。人為的に掘られた遺構と考えるほうが合理的であろうと考えを改めた。

【溝の時期】

溝SD13埋土内から複数個体の壺形埴輪が出土したことから、この溝が古墳の周溝ではないのかという疑問が当然出てくる。溝から出土した遺物コンテナ38箱分の99％以上は弥生時代中期から後期前半にかけての土器である。溝の底面でSX11として取り上げた弥生土器群もまとまって出土している。試掘調査で古式土師器が出土したとの記録があるが、確実にそうであると言える破片をほとんど見ない。古墳時代の遺物は第24図58の初期須恵器の器台だけである。また、溝SD13は金海（新）式と城ノ越式の甕棺墓を切っている。出土遺物から見ると、溝の時期は弥生時代中期中頃から後期にかけてと推測される。

埋土の色について興味深い話を同僚から伺った。SD13の埋土は特徴的な黒灰色砂質土であるが、砂が黒いのは黒ボク土壌が混じっているためである。黒ボク土は火山灰に由来し、そこに多量

の有機物が加わって形成される。黒ボク土の形成の時期がいつなのかが問題となるのだが、姪浜遺跡や藤崎遺跡など博多湾沿岸の砂丘に黒ボク土が形成されるのは弥生時代終末から古墳時代初めにかけての時期だとする研究成果があるのだという。確かに本調査区の甕棺墓の埋土は淡黄色砂で黒くはない。黒ボク土の形成時期が弥生時代終末期以降にくだるのであれば、この溝の年代もそうなるであろう。

溝の年代については、以上の2つの説を併記する形にしたい。なお、古墳の周溝が存在したが弥生時代の溝SD13と掘り分けることができなかった可能性も否定できない。もし周溝がここにあるとするならば、砂丘の尾根が調査区北半側にあるので、古墳本体はSD13の北西側にあるだろう。

4．遼東・山東系土器

SD13から出土した遼東・山東系土器（第24図48）は、日本列島での出土報告数がわずかしかない稀有な遺物である。当該地域との直接的あるいは間接的交流を示唆する重要な資料である。

奇妙な遺物があることには早くから気付いていたが、福岡市博物館の森本幹彦氏からこれが遼東・山東系土器ではないかとのご教示を得た。その後、森本氏のご紹介で郷仁盛先生（嶺南大学教授）に実見していただく機会があり、遼東・山東系土器であるとのご所見をいただいた。

遼東・山東系土器は、灰色の瓦質土器である。球形に近い胴部に短い口縁部がつく壺が編年されている。ろくろを用いた回転ナデを施す点は楽浪系土器と共通するが、「胴部下半に横方向の縄目タタキを持つ」（武末2011）点がその大きな特徴である。時期については楽浪土器より古い資料か、同時期の資料かは意見の分かれるところであるらしい。日本列島出土資料としては、原の辻遺跡（長崎県壱岐島）と大鳥ろくどん遺跡（福岡県宗像市）のものが報告されている（武末2011・古澤2018）。

■参考文献

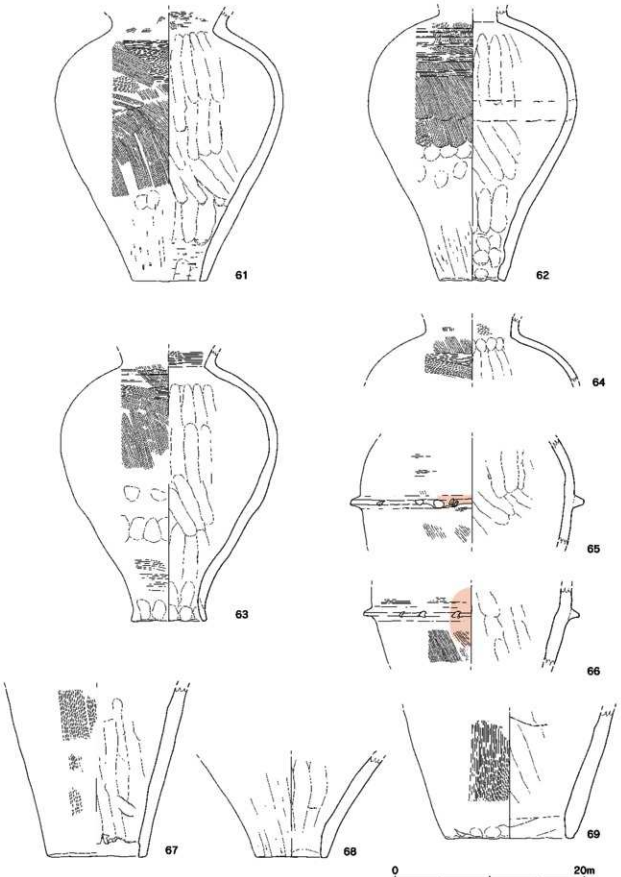
武末純一、2011、「沖ノ島祭祀の成立前史」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅰ』、21・23頁（「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 編）

古澤義久、2018、「弥生時代壱岐島における韓半島系資料」「土器・金属器の日韓交渉』、104・116頁（嶺南大学校博物館で開催された第2回「新・日韓交渉の考古学－弥生時代－」研究会の発表資料）

姪浜遺跡出土品は9破片あり、うち５点が接合できた（写真36）。口縁部と底部を欠き、胴部は細身で最大径20.8cmを測る。外面は上半に回転ナデ、下半に横方向の縄目タタキを施す。縄目タタキ直上の肩部中位に縄を巻きつけた痕跡が4条ついており、これも遼東・山東系土器の特徴である。原の辻遺跡、大鳥ろくどん遺跡例とはちがって、内面下半に独特な当て具痕が見られる。内面中位に明瞭な段がある。上半と下半のパーツを別々につくり、ここで接合したように見える。

製作技法について、郷仁盛先生と同僚の久住猛雄氏が詳細に検討してくださった。体部内面下半の小円が陽刻されるような当て具痕は、中国で「麻点文（までんもん）」と呼ばれている。漢代の山東、河北、遼東には珍しくはない。当て具痕をよくみると円形の単位の切り合いが分かる。土器に当たる面に同心面文を刻めば青海波文になる理屈だが、この「麻点文」の当て具は、土器に当たる円形部分に多くの小円の凹みを刳り込んでいる。よって、小さな粒状の円が陽刻される。小円の刳り込みに小円礫などを入れ込んで、逆に当て具痕が小円の除刻になる場合もあるそうである。

体部外面上半にライトを当てると、回転ナデ以前の縦方向のタタキ痕（縄文タタキ）が確認できる。また下半にも、最終的な横方向の縄文タタキ以前に、縦方向のシワ状痕跡がいくつか確認されることから、全面にわたって縦方向タタキでまず整形したことが分かる。その後、タタキ痕を消すように全



第25図　壺型埴輪実測図(1/4)

体にわたってろくろで回転ナデを行う。この段階では広い平底であったと思われる。次に体部下半から底部にかけて、球胴風に見せるために、外面を横方向の縄文タタキ、内面を麻点文当具で再整形する。最後に体部中位に縄を２～３回転巻いて縄目装飾をつける。体部中位の縄目装飾については、縄目に一見大小があるが、連続する縄目で大小の変化があり、土器本体への付き方の深浅の違いであろう。

５．壺形埴輪

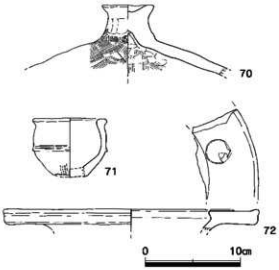
SD13出土遺物の整理作業中に壺形埴輪を発見した。福岡市南区の老司古墳出土のものと形態がよく似ている。老司古墳は全長76mの前方後方墳で、4世紀末～5世紀初めの築造と考えられている（福岡市教育委員会1989『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集）。姪浜遺跡に老司古墳と同時代の古墳が存在したことを示す初めての遺物である。そこで他の遺構も含めすべてのコンテナを丹念に見て、内面の特徴的な指の痕跡や器壁の厚さなどを手がかりに小片を探し出した。口縁部は見つからなかった。埴輪は少なくとも７個体はある。SD13のなかのどの位置から多く出土したのかは、現場段階で気づいていなかったため不詳である。

第25図に壺型埴輪の実測図を示す。胴部は最大径を上半に持ち、そこから底部に向かってすすぼまっていき、底部は焼成前穿孔をする。口縁部が見つからなかったが、老司古墳では素口縁のものと二重口縁の2種類がみられる。老司古墳の事例では一度壺形に作ってから底部を切り離して穿孔したと思われるものがあるが、姪浜の事例は、おそらく初めから底部はつくらなかったと思われる。また63のように胴部をつくった後にひっくり返して粘土を継ぎ足したために底の接地部直上で外反するものがある。接地部の形状に2系統がみられる。体部外面上半は縦方向の刷毛目を施し、外面中位はナデで指頭圧痕が残り、底部付近を削り上げるものが多い。内面には指で縦方向に整形した痕跡が明瞭に残る。老司古墳の壺形埴輪の内面調整はケズリであり製作技法は大きく異なる。

61は胴部最大径24.0cm、残高28.6cmを測り、接地部付近の内面を削る。**62**は胴部最大径22.0cm、残高28.8cmを測り、胴部中位内面に粘土板の継ぎ目が確認できる。**63**は胴部最大径22.8cm、残高28.8cmを測り、接地部に粘土を内側から継ぎ足し外反させる。**65・66**は胴部に突帯をめぐらす。円筒埴輪のタガとするには貧弱なので、突帯付きの壺形埴輪か。突帯に刻み目を入れ、その付近に赤色顔料を塗布している。**69**は器壁が厚く、他のものよりも大型の埴輪か。

６．その他の弥生時代の遺物

第26図**70**は壺である。ST08周辺出土。**71**は小型壺である。口径7.8cm、器高6.2cmを測る。SK123出土。**72**は壺の鍋形口縁である。口縁上面に丸いボタン状の装飾がある。SK51出土。いずれも中近世の遺構に混入して出土したものである。

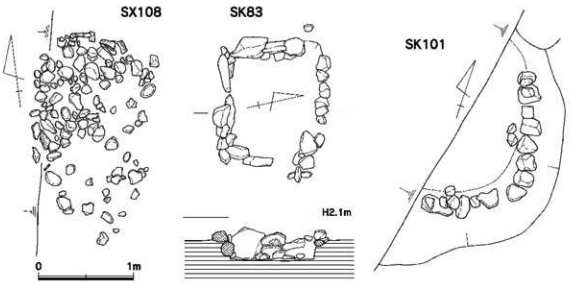


第26図　その他の弥生土器実測図(1/4)

7．集石遺構・石組土坑

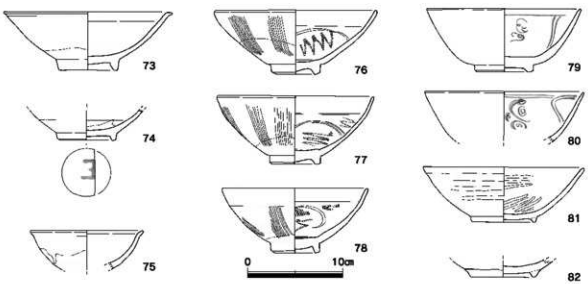
集石遺構ＳＸ１０８（第27図、写真15）

2区第1面で検出した。約2.2m×1.4mの範囲に面的に石が集中する。石に混じって貿易陶磁器が多数出土した。石を敷いた土坑の床面だけが残ったものか。石材は様々なものが混じる。本調査地点ではこの遺構の周辺に限って貿易陶磁器がまとまって出土する。紙幅の都合上一部のみ掲載する。



第27図　SX108、SK83・101実測図(1/40)

第28図**73**・**74**は白磁の碗である。73は口縁が外反し上面を水平に切る。口径19.8cm、器高6.2 cm、底径6.2cmを測る。74は高台が低く見込は露胎。底に墨書を施す。「王」か。**75**は白磁小碗で外面中位以下は露胎。口径12.0cm。**76**～**78**は同安窯系青磁碗である。体部はやや内弯気味に立ち上がり、体部上位で若干内側に屈曲する。内底見込と体部の境に段を有し、内面上位に沈線を入れる。外面に



第28図　SX108出土遺物実測図(1/4)

は放射状に細かい櫛目文を、内面にはへらによる花文と櫛によるジグザグ文を施す。76で口径17.2cm、器高6.8cm、底径5.0cmを測る。**79・80**は龍泉窯系青磁碗である。外面は無文、内面は花弁様に区切った区画内に雲文を描く。79で口径16.4cm、器高6.7cm、底径6.2cmを測る。**81・82**は瓦器椀である。81は内外面ともに丁寧に磨く。口径17.0cm、器高5.8cm、底径6.8cmを測る。

石組土坑ＳＫ８３（第27図、写真16）

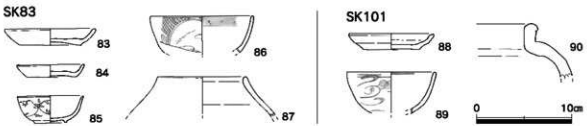
側壁に石を積んだ近世の土坑である。底から2段が残る。石の大きさや形状は不揃いである。西壁には割れた石臼も利用している。底面には石を敷いていない。石組みの内側で1.0×0.8mを測る。

第29図**83**は土師器坏、**84**は土師器小皿である。いずれも回転糸切り。**85**は色絵磁器の小碗である。赤と緑で花を描く。口径7.0cm、器高2.9cmを測る。**86**は染付の碗である。**87**は褐釉陶器の壺である。

石組土坑ＳＫ１０１（第27図、写真17）

側壁に石を積んだ近世の土坑である。試掘トレンチによって2辺は破壊されている。石は底の1段だけ検出した。

第29図**88**は土師器坏である。底部は回転糸切り。口径9.0cm、器高1.6cmを測る。**89**は染付の碗である。**90**は焼締陶器の大型甕である。小片であるが口径30cm以上になろう。暗赤灰色を呈する。



第29図　SK83・101出土遺物実測図(1/4)

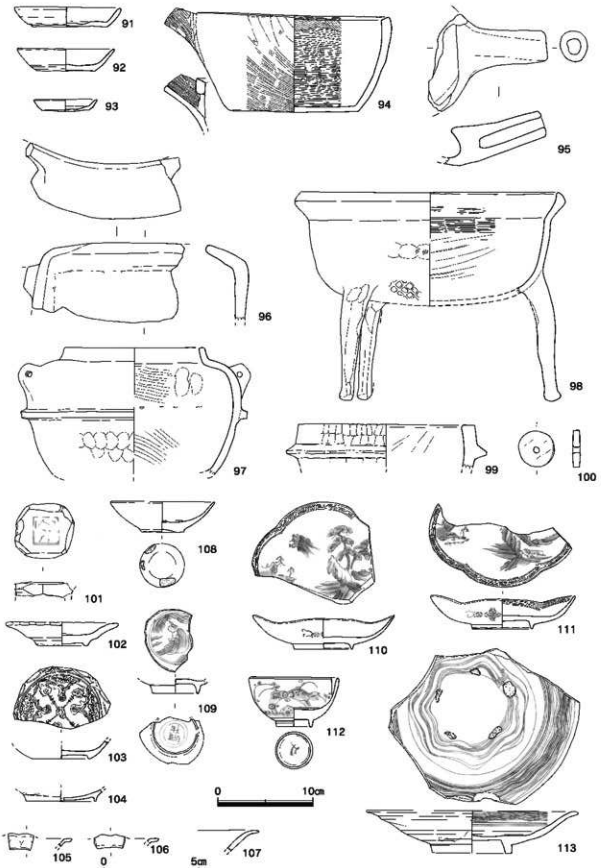
8．その他の中近世の遺構と遺物

中近世の遺構が調査区の全面にわたって分布するが、紙幅の都合上、概略を報告する。

土坑を48基検出した。多くは隅丸の正方形あるいは長方形を呈する（写真31）。本調査区の北縁を旧唐津街道が東西に走り、姪浜は近世に宿場町として栄えたが、多くの土坑が街道と平行または直交方向に軸を取る。これらの土坑は弥生時代の遺構を掘り壊して作られている。出土遺物に中近世遺物が一部混じり、むしろ弥生土器が出土量の7、8割を占める土坑が少なくない。ただし、埋土が弥生時代の遺構とはまったく違うので時期の識別は容易である。

井戸は４基検出した。瓦井戸が１つ、おそらく桶であろう円形の井筒のプランが底付近で検出できる井戸が３つである（写真32・33）。

第30図**91・92**は土師器坏、**93**は土師器小皿である。いずれも回転糸切り。**94**は土師質の片口鉢である。全面に刷毛目を施す。ほぼ完存し口径20.2cm、器高10.6cm、底径13.8cmを測る。**95**は土製ほうろくの取手付近である。**96**は土製かまどの庇である。**97**は瓦質土器の釜である。外面には煤が付着する。口径14.8cm、胴部最大径24.0cm、残高13.6cmを測る。**98**は瓦質土器の足鍋である。足は1本だけ残るが、おそらく3足であろう。底面付近に格子のタタキ痕が一部残る。底から外面に



第30図　その他の中近世遺物実測図(1/4、1/2)

かけて煤がびっしりと付着する。口径28.6cm、器高22.1cmを測る。**99**は滑石製石鍋である。**100**は滑石製紡錘車である。**101**は龍泉窯系青磁碗である。見込に印文がスタンプされているが判読できない。**102**は景徳鎮青磁の輪花皿である。器壁は厚く見込の釉をはぎ取る。釉は緑灰色を呈する。口径11.8cm、器高2.5cmを測る。**103**は青花の皿である。碁笥底。**104**は交趾焼の皿か。外面の釉はターコイズブルーを呈する。見込の釉は劣化して緑と青が混ざったような色の脆い粉末状になっている。**105**～**107**は中国華南地方の交趾焼である（写真36）。型づくりの瑠璃釉輪花小皿の破片である。非常に薄く独特のターコイズブルーの釉色を呈する。**108**は陶器の碗である。灰色釉が全体に雑にかけられ、見込と畳付に砂目が残る。**109**は青花の碗である。**110**・**111**は染付の皿である。型づくりの組品の2個体である。**112**は染付碗である。**113**は陶器皿である。褐色釉の地に白の刷毛目文様を施す。見込に5つの目跡がある。口径22.4cm、器高4.5cmを測る。

第４章　　まとめ

今回の第6次調査では、弥生時代の甕棺墓11基（成人棺10、小児棺1）と幅約7mの溝状遺構1条、土坑2基、および中近世の集落跡（土坑・井戸・溝・ピット）を検出した。

旧唐津街道での下水道工事に伴い東西約270mにわたってトレンチ状に行われた第2次調査（夜間の緊急調査）の所見では、本地点より50～150m東側で甕棺墓が集中して検出され、甕棺墓は本地点までは延びないと予想されていた。しかし、今回の調査において11基の甕棺が検出され、中近世以降の遺構により破壊されたものも含めば、さらに多くあったと推測される。甕棺墓の分布が従来の予想よりさらに西側に広がることが明らかになった。

溝SD13から遼東・山東系土器、朝鮮半島系の無文土器が出土した。第3次調査においても漢式三角鏃や無文土器が出土しており、中国大陸、朝鮮半島との交流を物語る重要な資料である。とくに遼東・山東系土器に関しては、これまで日本列島からの出土は、原の辻遺跡と大島ろくどん遺跡（福岡県宗像市）の2例の小片が報告されているのみである。今回出土した遼東・山東土器は、器形を大まかに復元できるうえに、外面下半の横方向の縄目タタキと内面下半の独特の当て具痕跡（麻点文）が確認でき、製作技法を観察できる、きわめて学術的価値の高い資料と言える。

またSD13から複数の壺型埴輪が出土した。老司古墳（福岡市南区）出土のものと形状がよく似ている。整理作業段階で気付いたため、古墳や周溝に関する現場所見を得ることができなかったが、老司古墳と同時期の有力者の古墳が姪浜遺跡にあったことを示唆する重要な発見である。SD13の黒灰色砂質土の特徴的な鍵層は、今後周囲で発掘調査が行われるときは要注意である。

これまで姪浜遺跡における発掘調査の事例は少なかった。近世宿場町以来の間口の狭い地割で小規模な開発が多いこと、中近世以降の掘り込みが多く、弥生時代の遺構の残りが悪いことが一因であろう。試掘調査で弥生土器が出土したとしても、果たして本調査をするほど弥生時代の遺構が遺存しているのか、判断が難しいケースが少なくないと思われる。今回の調査結果により、弥生時代の対外交流の拠点、古墳時代の有力者の古墳造営地としての姪浜遺跡の重要性がいっそう明らかになった。

写真1　1区全景(北から)

写真2　2区溝SD13検出状況(北から)

写真3　2区第1面全景（北から）

写真4　2区第2面全景（北から）

写真5　4区SD13検出状況（南から）

写真6　甕棺ST01（南から）

写真7　甕棺ST02（南から）

写真8　甕棺ST03（西から）

写真9　甕棺ST05・06（東から）

写真10　小児棺ST07（北から）

写真11　甕棺ST12（南から）

写真12　土器集中部SX11（西から）

写真13　SX11作業風景

写真14　SX11（南東から）

写真15　集石遺構SX108（南西から）

写真16　石組土坑SK83（南東から）

写真17　石組土坑SK101（北から）

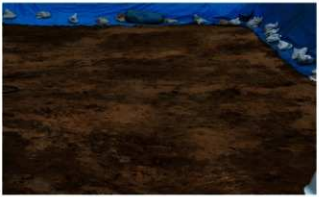


写真18　1区北西部表土剥ぎ段階（東から）

写真19　1区遺構検出作業（北から）

写真20　1区遺構掘削作業（北東から）

写真21　1区完掘状況（南東から）

写真22　2区表土剥ぎ直後（北から）

写真23　2区遺構掘削状況（北東から）

写真24　3区全景（北から）

写真25　4区全景（南から）

写真26　甕棺ST04(西から)

写真27　ST08(東から)

写真28　甕棺ST09(北から)

写真29　甕棺ST10(南東から)

写真30　3区で検出した甕棺片(北西から)

写真31　土坑SK51(東から)

写真32　井戸SE92(南から)

写真33　井戸SE109(東から)

写真34　甕棺

写真35　SX11出土土器

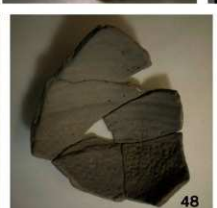


写真36　壺型埴輪、遼東・山東系土器ほか

報告書抄録

ふりがな	めいのはまいせき
書名	姪浜遺跡５
副書名	―第６次調査報告―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1377集
編著者名	上角智希
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2019年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
めいのはまいせき 姪浜遺跡	ふくおかけんふくおかしにしく 福岡県福岡市西区 めいのはま 姪浜３丁目3135-9他	40135	367	33° 35′ 17″	130° 19′ 30″	20170419 ～ 20170727	575	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
姪浜遺跡	集落・墓地	弥生時代・中近世	甕棺墓・土坑・溝・井戸	弥生土器・土師器・陶磁器・瓷質埴輪・遼東・山東系土器	甕棺墓群を検出。瓷質埴輪、山東系土器が出土。

要約	姪浜遺跡は、弥生時代の甕棺墓・集落を主体とした遺跡である。本調査地点は遺跡のほぼ中央に位置する。過去の調査により本地点より東側に甕棺墓群が分布することが確認されていたが、本調査区においても甕棺墓11基が検出され、その範囲がさらに西側まで伸びることが明らかとなった。また、弥生時代中期から後期にかけての溝が検出され、その溝から瓷質埴輪が出土した。また、中国大陸の遼東・山東地方に見られる遼東・山東系土器の出土は日本列島ではほとんど出土例がない非常に稀有な発見である。

姪浜遺跡５

―第6次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1377集

2019年３月25日発行

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷　有限会社 アートプロセス
福岡市南区高木二丁目８番７号